

P06b **あすか衛星によるカメレオン座分子雲の観測**

山内茂雄 (岩手大人社)、小山勝二 (京大理)

Einstein, *ROSAT* 衛星の観測により、若い進化段階にある星も X 線を放射するような活発な活動性を持っていることがあきらかにされた。この X 線は、 10^7 K を超えるような高温プラズマガスからの放射であり、X 線フレアも起こすことから、太陽にみられるような磁気的活動性によるものと考えられている。低エネルギー領域に限られていた *Einstein* や *ROSAT* 衛星の観測では、X 線放射のスペクトルについて、正確に調べることは難しい。私たちは、あすか衛星を用いて、星形成領域の観測を継続して行なってきた。今回は、南天にあるカメレオン座分子雲の観測結果について報告する。

カメレオン座分子雲は、140–200pc 程度の比較的近傍に位置しており、北天のおうし座分子雲、へびつかい座分子雲などとならんで、星形成の観測的研究には適したターゲットである。あすか衛星は、Cha I 分子雲を 4 点、Cha II 分子雲を 4 点、Cha I 分子雲と Cha III 分子雲の間に位置し、T Cha を含む小規模分子雲 (DC300.2–16.9) を 1 点観測し、全部で 40 あまりの X 線天体を検出した。過去に行なわれた光学、赤外線、X 線観測の結果をもとに対応天体を調べたところ、大多数は既知の天体に同定できたが、対応天体の見つからないものもいくつかあることがわかった。次に検出できた天体の X 線スペクトルを調べた結果、対応天体の見つかったものの典型的な温度は 1–3 keV であり、観測した 3 つの分子雲領域で大きな違いは見られなかった。この結果はおうし座分子雲やへびつかい座分子雲で検出された前主系列星の結果とも矛盾しない。一方、対応天体の見つからなかったものについては、誤差が大きい硬いスペクトルを示す傾向がある。